

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・奥山正樹

本年四月一三日から一〇月一三日まで大阪・関西万博が開催されている。日本で開催される万博としては六回目にあたる。埋立地である夢洲の会場は約一五五ha。全周約二kmの世界最大の木造建築物「大屋根リング」をシンボルに、目標来場者数は二、八二〇万人を掲げている。開催中は環境省などによる国立公園やネイチャーポイントも開催されている。一方で、会場周辺一帯は、埋立造成により湿地が創出され渡り鳥の重要な中継地でもあるとして、閉会後の埋立て計画などに対し複数の自然保護団体が懸念を表明している。

本稿では、日本で開催された過去の万博について、自然環境との関係から振り返ってみたい。

万博とは

万博（万国博覧会、EXPO）

幻の日本博（一九三二、一九四〇）

は国際博覧会条約に基づきBIE（博覧会国際事務局）が承認した国際展示会を指す。一八五一年にロンドンで初開催され、日本の参加は一八六七年のパリ万博からである。その後、大戦による中断を経て一九五八年に再開され現在に至る。

日露終戦を機に一九一二年に開催予定だった日本大博覧会は、陸軍青山練兵場と代々木御用地を主会場に計画されたが、財政難等のため明治天皇在位五〇周年（一九一七年）へと延期され、一九一一年には中止が決定された。この経緯の中、日光を帝国公園化する請願と富士山に国設大公園を設ける建議が一九一一年の帝国議会に同時に提出され、後の国立公園の誕生にも影響を与えたことが知られている。一部着工されていた会場の設計案と跡地の公園化構想は、

その後明治神宮の内苑と外苑に受け継がれた。

また、東京・横浜を会場にした紀元二六〇〇年記念万博（一九四〇年）を開催する計画もあったが、入場券も発売され準備が進む中、第二次大戦が勃発し中止となった。

大阪万博（一九七〇）

日本かつアジア初の万博として一九七〇年に開催され、六、四〇〇万人を超える入場者数を記録した。会場面積は三三〇ha。シンボルの「太陽の塔」には「生命の樹」を表現した内部展示が施されていた。アメリカ館では前年にアポロ一号が持ち帰った「月の石」が展示され人気を集めた。

閉会後、会場跡地のうち約八〇%（二六四ha）は万博記念公園として整備された。このうち太陽の塔や日本庭園（二六ha）を含む一三〇haは自然植生を再現する「自然文化園地区」として整備され現在に至る。開催中もアミューズメントエリアだった隣接地約二〇haは一九七二年に遊園地（エキスポランド）となったが、二〇〇九年に閉園し、現在は商業施設や水族館などの複合施設（EXPOCITY）となっている。

沖縄海洋博（一九七五〜七六）

沖縄返還記念事業として一九七五〜七六年に開催され、会場規模は一〇〇ha（陸域七五ha、海域二五ha）、入場者数は約三五〇万人だった。

未来型海洋都市のモデル人工島「アクアポリス」が注目を集め、会場内で運行された新交通システムは、沖縄では戦後初の鉄道路線となった。

終了後、跡地は都市公園法に基づく国営公園（沖縄記念公園海洋博地区）となった。園内の水族館は、二〇〇二年に老朽化により再整備され、「沖縄美ら海水族館」となった。

なお、沖縄海岸国定公園は一九六五年に琉球政府立公園として指定され、一九七二年の本土復帰に伴い国定公園になっており、海洋博の会場とは重なっていない。

つくば科学万博（一九八五）

筑波研究学園都市をメイン会場に一九八五年に開催され、会場規模は一〇一・六ha、入場者数は二、〇三〇万人を超えた。会場へのアクセスのため国鉄常磐線に仮設の「万博中央駅」が置かれ、会場ゲ

ートまでの二両連節バス「スーパースャトル」が運行された。

国内外から最新の科学技術の展示が数多く、開催中に民営化された電電公社（N T T）や、超大型スクリーンで渡り鳥の飛翔映像を上映したサントリー（燦鳥館）など、国内企業のパビリオンも人気を集めた。

終了後、メイン会場跡地の大部分は筑波西部工業団地となったが、日本政府館や調整池が置かれていたブロック約六haには、「科学万博記念公園」が造成された。第二会場（吾妻）にあった政府出展施設「つくばエキスポセンター」は、翌一九八六年に科学館として再オープンし現在に至る。

花の万博（一九九〇）

大阪市と守口市にまたがる鶴見緑地約一四〇haを会場に一九九〇年に開催された「国際花と緑の博覧会」、来場者数は二、三〇〇万人を超えた。アジア初の国際園芸博覧会でもあり、会場は、大池を囲む花栈敷・花の谷などの「野原のエリア」、パビリオンや飲食店が建ち並ぶ「街のエリア」、世界最大の花ラフレシアの展示が話題となった「政府苑」を含む国際庭園

が点在する「山のエリア」の三エリアから構成された。

会場跡地の一二二haは大阪市が「花博記念公園鶴見緑地」として整備し、市民の憩いの場となった。パビリオン等の多くは撤去されたが、大温室「咲くやこの花館」、国際陳列館、国際庭園などは現在も残され公園施設として利用されている。

愛・地球博（二〇〇五）

二〇〇五年に愛知県の長久手会場（約一五八ha）と瀬戸会場（約一五ha）で開催され、入場者数は二、二〇〇万人超を記録した。

当初の基本構想（一九九四年）では会場約六五〇ha、予想入場者数四、〇〇〇万人、跡地は学術研究開発ゾーンと新住宅市街地開発事業とされていたが、発表後、メイン会場（瀬戸会場）の「海上の森」での環境改変に批判が沸き起こり、会場面積を五四〇haに縮小、予想入場者数も二、五〇〇万人に減らした計画で一九九七年に開催が決まった。その後も、海上地区でオオタカの営巣が確認（一九九九年）されるなどにより、B I Eからも見直しが求められた結果、二〇〇〇年にメイン会場は長久手

会場（愛知青少年公園）に変更され「環境万博」を打ち出すこととなった（目標入場者数は一、五〇〇万人）。開催中は、日本政府のグローバルハウスで展示された、ロシアの永久凍土から発掘されたマンモスなどが話題を集めた。

閉会后、長久手会場は県により「愛・地球博記念公園（モリコロパーク）」として開園した（面積約一九〇ha）。園内には人気を博した「サツキとメイの家」を含む「ジブリパーク」も整備され（約七ha）、二〇二二―二四年に段階的に開業した。瀬戸会場跡には瀬戸市が「瀬戸万博記念公園（愛・パーク）」（約一・三ha）を整備し二〇〇九年に供用した。旧瀬戸愛知県館は、海上の森全体の保全管理と体験学習の機能を担う「あいち海上の森センター」となり、県が二〇〇六年から供用している。

おわりに

大阪・関西万博の終了後、二〇二七年には早くも次の万博となる「国際園芸博覧会（GREEN×EXPO 2027）」が横浜市で開催される。会場は米軍から返還された上瀬谷通信施設の一部で、閉会后は環境と防災をテーマとする都市

公園が建設される予定だが、周辺には大規模テーマパークも構想されているという。

これまでの万博はいずれも、全体テーマから会場跡地の活用まで自然環境と深く関係しており、今後の開催でも議論が尽きることはないだろう。

日本で開催された万博とテーマ

開催年	名称	テーマ
1970	日本国際博覧会 （大阪万博）	人類の進歩と調和
1975-76	沖縄国際海洋博覧会 （沖縄海洋博）	海—その望ましい未来
1985	国際科学技術博覧会 （つくば科学万博）	人間・住居・環境と科学技術
1990	国際花と緑の博覧会 （花の万博）	自然と人間との共生
2005	日本国際博覧会 （愛・地球博）	自然の叡智
2025	日本国際博覧会 （大阪・関西万博）	いのち輝く未来社会のデザイン

奥山 正樹●おくやま まさぎ
一九九〇年環境庁（当時）入庁。生物多様性センター長、信越自然環境事務所長などを歴任。鹿児島大学を経て二〇二四年四月から江戸川大学教授、国立公園研究所長。博士（農学）、技術士（総合技術監理・環境部門）。